建礼門院右京大夫集の構想に関する一試論

小島道子

春の花と栄え、秋の紅葉と散り果てた平家の運命はかたわらの一女性の一生をもまきこんでしまつた。彼女、建礼門院右京大夫は、世尊寺家の伊行を父とし、尊の名手夕霧を母として、文学的・芸術的にめぐまれた家庭に生まれ育つて、建礼門院徳子に仕え、はなやかな明るい毎日を送つていた女性である。しかし、平家の公達、新三位中将資盛を恋人としてもつたが故に、寿永の嵐をまともに受けねばならなかつたし、彼女の青春もうばいとられてしまわなければならなかつた。彼女が、ある時期に過去をふりかえつて、『建礼門院右京大夫集』として書き綴つたものは、そうした時代の嵐に自己の運命をもてあそばれた一女性の心の記録であつた。それはあわれにも美しい記録である。

この小稿では、彼女が自己の歌をいかに配列し、集をどのように構成して彼女の心の世界を表現しているかを考えてみたいと思う。

一

『建礼門院右京大夫集』は、全部で三百五十九首(注1)の歌で構成されており、それらの歌には、大部分長文の詞書が付されているが、中には、「詞書＋歌一首」で一つのまとまりをもつているものもあり、又、贈答歌として、一つのまとまりの中に数首の歌を含み、その間を詞書でつないで一まとまりを構成したりしているものもある。そのまとまりを、ここでは「一記事」として、この集の構成単位と考えたいと思う。今全体を記事に分けてみると次のようである。

129	60
130・131	61
132～134	62
135～138	63
139～142	64
143・144	65
145	66
146・147	67
148・149	68
150・151	69
152	70
153・154	71
155	72
156・157	73
158・159	74

112	45
113	46
114	47
115・116	48
117	49
118	50
119・120	51
121	52
122	53
123	54
124	55
125	56
126	57
127	58
128	59

81・82	30
83	31
84～86	32
87・88	33
89・90	34
91・92	35
93	36
94～97	37
98・99	38
100	39
101	40
102～105	41
106～109	42
110	43
111	44

59・60	15
61	16
62	17
63・64	18
65	19
66	20
67・68	21
69	22
70・71	23
72・73	24
74・75	25
76・77	26
78	27
79	28
80	29

番歌の号	番記事の号
1	1
2	2
3	3
4・5	4
6・7	5
8	6
9～11	7
12・13	8
14～29	9
30～53	10
54・55	11
56	12
57	13
58	14

327 ~ 329	135
330 • 331	136
332 • 333	137
334 ~ 346	138
347 • 348	139
349 ~ 353	140
354 ~ 356	141
357	142
358 • 359	143

257 • 258	120
259 • 260	121
261	122
262	123
263 • 264	124
265 • 266	125
267	126
268	127
269 • 270	128
271 ~ 321	129
322	130
323	131
324	132
325	133
326	134

224 ~ 226	105
227 ~ 229	106
230	107
231 • 232	108
233 ~ 236	109
237	110
238	111
239 ~ 241	112
242	113
243 • 244	114
245 • 246	115
247 ~ 250	116
251	117
252	118
253 ~ 256	119

198	90
199	91
200 • 201	92
202 • 203	93
204	94
205	95
206	96
207	97
208 • 209	98
210	99
211	100
212 • 213	101
214 • 215	102
216 ~ 221	103
222 • 223	104

160 • 161	75
162	76
163	77
164 • 165	78
166	79
167 • 168	80
169	81
170	82
171	83
172 • 173	84
174 ~ 183	85
184 • 185	86
186 ~ 191	87
192 ~ 195	88
196 • 197	89

以上のように百四十三の記事に分けられると考える。そのうち1～93は上巻であり、94～143は下巻である。

二

それでは、この百四十三の記事はどのように配列されているのであろうか。彼女はそのことについて序では、

…ふと心におぼえしをおもひいでらるゝまゝに…

とのべ、跋においては

…思いでらるゝ事どもを、すこしづつかきつけたるなり。

と述べているが、しかし、その配列は決して無秩序なものではないようであり、作者によつて整理され配列された跡が感じられるのである。それは一見、年代順に並べられているように見られるが、詳しく見てゆくと、年次が前後している個所もあり、決して年代的配列だけではなく、種々の連想によつてまとめられた集団を形づくつているように思われる。そうした意味からいえば、「おもひいでらるゝまゝに」と言えるのかもしれない。それらの連想は、あるいは作者の意志には関係なく、結果として偶然そうなつたにすぎないとも考えられなくはない。が、それが集の構成上大きな効果をあらわしているのであり、又、序と跋をつけたり、記事の照応をみせたりするほどの意識をもつている作者であるから、効果を承知の上でこのように配列したと考えてもよいように思われるのである。

こうした連想は、その形式において、(1)人物、(2)時間、(3)事物・内容、(4)場所の連想による配列の四つに分けられるのではないだろうか。順にみてゆこう。

まず、主として人物の連想により配列されている部分は六ケ所ある。即ち

2～3は天皇・中宮の美しいお姿にお二方の御生母の姿を連ね、

4～7は実宗から実宗・維盛との思い出に連ね、ついで維盛・重衡、近衛殿（基通）・隆房・重衡・維盛・資盛と、宮中における公達の姿を連ねている、

12～16は資盛の父重盛、叔父宗盛に関する思い出から資盛との恋へと

24～26は斎院の中将から清経、資盛へと、

87～91は又、維盛、重衡から資盛へと連想が流れ

138～139は親長に関する思い出が並べられている。

こうしてみてくると、2～3、138～139の連想をのぞくと、

他はすべてその連想が資盛に向つて流れこんでいるのを感じる。資盛との恋愛以前の記事と思われる4～7の配列においても、その連想は

11もろともにたづねてをみよ一枝の
　　花にこゝろのげにもうつらば

と詠んだ資盛に流れこんでいるようである。ここに、作者の一つの意図がひそんでいるのではないだろうか。

時間の連想による配列に関しては、この集が年代的に配列されていると人々に感じさせるほど、いたるところにあらわれているが、最もその意識の強いのは下巻の始め、寿永元暦の争乱のあたりの記事の配列であろう。この部分は103の記事の始めに維盛入水から連想された清経があらわれるだけで、あとは時間の経過による世の移り変りや作者の心情を順に書き連ねているのである。

次に、事物・内容による連想は比較的多い。

23～24は桜の花に関する贈答歌
28～29は時鳥と橘を並べた歌
30～32は端午の節句の贈りものに関する歌
34～35はみごとな紅葉を贈られた際の贈答歌
39～42はすべて不幸をとぶらう歌
61～77は恋に関する歌
92～93は母の死と高倉院の崩御を並べて、上巻を終つている。下巻では
126～127は母と資盛の法事の記事
136～140は昔からの友隆房をとぶらう記事につづけ、実宗・親宗の没後のその子公経・親長との贈答歌を並べ、最後に通宗の死を記している。

以上のように、この種の連想をみせている部分は比較的多く、又、連想の強さの面からいつても効果があるように思われる。

最後に、場所の連想によるものであるが、これは、
54～57の里
79～84の西山
115～120の坂本
のように時間的連想と表裏一体となつているものが多い。

その他では
3～4・7～8は中宮の御かた藤壺での出来事という連想
43～46は宮中での思い出という意識がみられる。

三

このような連想が、ある部分ではそれだけで連鎖がとぎれ、又ある部分は連想が他の連想を呼び、種々の連想がつながつて一つの大きな集団を形づくつているのである（注2）。ここでそれらの連想によつてつくられた集団を考えてみよう（注3）。

上巻

集団	記事の番号	歌の番号
Ⓐ	1	1
Ⓑ	2〜8	2〜13
Ⓒ	9〜10	14〜53
Ⓓ	11〜22（20・22）	54〜69（66・69）
Ⓔ	23〜27（27）	70〜78（78）
Ⓕ	28〜36（36）	79〜93（93）
Ⓖ	37〜38	94〜99
Ⓗ	39〜42	100〜109
Ⓘ	43〜46	110〜113
Ⓙ	47〜48	114〜116

下巻

Ⓚ	49〜53	117〜122
Ⓛ	54〜60	123〜129
Ⓜ	61〜78（72・78）	130〜165（155・164 165）
Ⓝ	79〜84	166〜173
Ⓞ	85〜91	174〜199
Ⓟ	92〜93	200〜203
Ⓠ	94〜111	204〜238
Ⓡ	112〜113	239〜242
Ⓢ	114〜120	243〜258
Ⓣ	121〜128	259〜270
Ⓤ	129	271〜321
Ⓥ	130〜135	322〜329

Ⓦ	136～140（140）	330～353（349 353）
Ⓧ	141	354～356
Ⓨ	142	357
Ⓩ	143	358～359

以上のように二十六の集団にまとめられるのではないかと思う。上巻は十六、下巻は十である。次に、これらの各集団の内容構成を順に検討してゆこうと思うが、ここでは構成上問題となる集団のみをとりあげることとする。

まず、Ⓑは承安四年正月一日の天皇中宮の美しいお姿より始め、同じ春、お二方の御生母建春門院と八条二位が中宮のもとで団らんされた時のお姿を連ね、中宮のもとに出入りしていた実宗を発端として、次々に平家の公達の美しい印象を連ねてゆき、その流れを資盛の登場へともつてゆく。そして最後にやさしい高倉天皇の御歌をもつて、感激裡にこの集団を終つている。この集団は右京大夫にとつて最も幸せな印象をのべた記事ばかりが連ねられており、わが身の幸福にひたりきつている箇所である。そして天皇・中宮・建春門院のお姿をそのまつしているのもこの集団においてだけである。高倉天皇はこののち、その崩御に至るまで一度もあらわれることなく、中宮も、直接姿をあらわすことは、下巻の大原の記事に至るまでは絶えてない。そうした記事をこの始めの集団に集めたことは何か意味のあることではあるまいか。もつとも宮仕え最初の正月のお二方の印象が強く、その連想で偶然このようになつたのかもしれないが、上巻を高倉天皇と中宮の美しさで始め、その崩御で終つていることや、女院を大原に訪れていること、最後に自分の名前を建礼門院右京大夫としたいと望んでいることなどを考えあわせると、それ以上にこのお二方の存在は右京大夫にとつて重要な意味を持つていたのではないかと思われるのである。つまり、天皇・中宮のお姿は右京大夫の幸福の象徴であり、幸福を具象化した存在であつたとはいえないであろうか。お二方のお姿を月と日にたとえ、

2 雲のうへにかゝる月日のひかりみる
身のちぎりさえ嬉しとぞ思ふ

と歌つた時が右京大夫にとつては一生の最も幸せな時であつた。そして、その時代の幸福感は不幸のどん底につきおとされた彼女の心中に、ただ一つの光として、また感激としていつまでも生きつづけたのである。その幸福の象徴が天皇・中宮のお姿であり、その幸福をあらわす具体的なことばがお二方の讃美であつたと考えられる。

それから、しだいに宮中における輝かしい公達の姿へと話題を移らせてゆき、資盛を登場させる。しかし、この場はまだ単なる「雲のうへ人」の一人であつた。

Ⓒは四十首の題詠歌が並べられている。長文の詞書をともなうのが普通のこの集においては、この題詠歌と下巻の七夕の歌が少し異質な形態をとつている。なぜこのような位置にこのような形態で並べられたのであろうか。この点に関しては、すでに飯田正一氏（注4）井狩正司氏（注5）が考察されておられるが、私も、この題詠歌群には両氏と同じように、前の部分のしめくくりとしての意味をもたせたいと思う。即ち、前のⒷの幸福をその次の部分に惰性的に流れこませないために、たとえばある大切なものが他のものといつしよに混ざつてしまわないために間にしきりをしておくように、Ⓑの幸せを他と区別する役目をしているのではないかと考えるのである。そして、さらに一つつけ加えると、この一連の題詠歌は、右京大夫の歌人としてのプライドを示しているのではないか。即ち、彼女は一応謙虚に「歌よむ人」ではないと言つているが、その反面歌人として認めてもらいたい気持ももつていたのではなかろうか。このことは集の最後の定家との贈答の記事においても感じられる。そして、その歌人としての右京大夫の作品がここに集められているのではないかと思われる。それらの歌は、中には題詠歌とは言え

16のどかなる春にあふよのうれしさは
竹の中なるこゑのいろにも

などⒷと同じような雰囲気を出しているものもあるが、その多くは、和歌の伝統に従つた観念的な歌であり、本歌取などの技巧もとり入れられていて、当時の歌風に合うべく努力した跡が感じられるのである。

次にⒹは、資盛の父重盛、叔父宗盛に関する思い出から資盛との恋へと進んでゆく。又11の同僚の女房と公衡の恋は、「なべての人」の恋として、「あるふしぎことやと人のことをみきゝてもおもひしかど」とあるような

右京大夫に教訓を与える恋だつたのであろう。ここは㋓とちがつて、もつぱら資盛を中心とする平家公達のありさまに注目しており、㋔のような場所の観念は入りこんではいない。

㋕は小侍従との花に関する贈答歌から出発して資盛との贈答歌へと発展してゆき、㋖はほととぎす・橘から端午の節句・紅葉によせる贈答歌を連ねている。この㋕㋖の部分は連想が多少とぎれ、性格が異るためにここでは二つに分けたが、共に四季の風物によする贈答歌が発端。骨格となつてまとめられているとも考えられ、その点ではいつしよにしてもよい集団かもしれない。

㋗は「雪のふかくつもりたりしあした」と「えんなるありあけ」の資盛の姿を回想している記事が並べられているが、前後の記事と多少性格が異るようである。即ち、これは思い出としては上巻に入るべき時のことを回想しているのであるが、記事の年次としては寿永元暦の乱後の思いを詠んだもののようであり、むしろ下巻の116の記事に似た性格のものである。上巻ではもう一つ91の記事がここと同じような性格の記事であり、又78の小宰相の記事も寿永元暦の乱後の内容を含んでいる（注6）。このことは、上巻の書かれた時期が寿永元暦の乱よりも後であろうということの一つの論拠となるであろうが、今はその問題は別のこととして、なぜこのような性格の記事が上巻にのせられたのであろうか。考えられることとして、その発想の違いがあげられよう。下巻の116の記事においては、橘の木に雪がふりつもつているというその時の状況から同じような状況にあつた過去の回想を引き出した形になつているのであるが、上巻の記事では、上巻における他の記事と同じ時点で書き出され、それに後の現在の心境がつけ加えられた形になつており、中心はあくまで回想の部分にあるのである。集を編纂する時になつて、資盛に関して作者の胸に最も鮮明な形で残つていたのはこの三つの思い出であつたろう。それは歌を中心とした思い出ではなかつたのである。集の記事は多く反古とか覚書によつていると思われるふしがあるが、ここは全く作者の胸中の思い出にたよつており、その点で下巻の時点で確立した作者の思い出の世界の一端をのぞかせていると言つてもよいのではないだろうか。

㋘は、恋の贈答歌と恋のなげきの歌を並べた集団である。このような恋愛中の相手との贈答歌は、この部分を

除いては、わずかに26の資盛が住吉から帰つた折の贈答歌があるだけで、ほとんどがこの集団に集中しているといつてよい。しかし、この部分の贈答歌が、すでに諸氏によつて説かれているように、隆信との贈答歌であつたとは皮肉なことである。あるいは資盛との贈答歌が手もとに残つていなかつたためか、あるいは作者の記憶ちがいで資盛の歌と隆信の歌とが混乱したためか、今は想像するしかない。しかし、はじめの部分は明らかに資盛と隆信を対照させて書いており、混乱がおきているとすれば67の記事からである。この記事は前後が隆信との贈答歌であるから、これも隆信とであろうと想像されているが、隆信が右京大夫にとつて「保護者を求めるといふ意味で身を委ねた男性」（注7）であつたろうことを考えあわせると、あるいは玉葉集のように資盛ととる方が真実であるかもしれない。しかし又、それも「隆信との恋愛から身を隠さう」（注8）と意図した作者の虚構にまぎらした表現であつたといえるのかもしれない。いずれにせよ、この場合この部分の記事を結ぶ連想は隆信と考えるよりもむしろ自己の恋の推移を表現すべき配列を行なつていると考えた方がよいのではないだろうか。

これらの贈答歌のあと、72で少し間を置いて、後に恋のなげきにしずむ生活を歌つている。あるいは72で㊿は切れて、73〜84を「恋のなげき」として一まとまりにした方がよいとも考えられる。しかし今このようにしたのは、77を見る時、それが㊿の集団の発端であつた61の資盛との恋を友に告げる記事とある意味で対応しているのではないかと思つたからである。二つの記事に出てくる友が同一人であるかどうかは不明であるが、恋の発端を友に知らせ、その後にその恋を表現してみせ、最後に、「雲のうへもかけはなれ」て後、「さてもその人はこのごろはいかに」と問われて、

163 雲のうへをよそになりにしうき身には
　　ふきかふ風の音もきこえず

と、恋人の途絶えを表現している記事を置くという構想をもつて、この集団を形づくつているように思われる。ここには、具体的な恋の生活の一部始終が要約されて表現されているのである。

下巻に至ると配列の形式が上巻と多少異なり、その大部分が淡々とした年代的配列で構成されている。そしてそれがかえつて資盛への追慕の情を純粋に歌いあげる効

果をあげているようである。逆に言えば、下巻に入つて記事の問題の焦点が資盛に統一されたので、このような配列ができたし、又効果をも与えたと言えるのかもしれない。上巻においては記事の種類が多種多様にわたつており、年代的な配列をしても、焦点がばら〳〵の統一のないものになつてしまうであろう。この点、上巻における種々の連想による配列はその統一性という面で効果を出しているのである。しかし、下巻においては焦点が資盛追慕に限定されているため年代的配列であつても統一でき、又それがかえつて作者の女性心理の推移を端的に描写しているのである。

Ⓠ〜Ⓢまでは資盛と別れたあとの右京大夫のなげきの日々を綴つている。「神も仏もうらめしく」と言いながらも資盛の後を弔つたり、資盛ゆかりの場所に行つて思い出にふけつたり、正に資盛を思う心一色にぬりつぶされている。その後は大原に女院をたずね、うさからのがれようと坂本に旅立つた。

Ⓣは坂本から帰つて後の生活である。ここにおいても資盛の思い出から離れられないことは同様であるが、この集団で特徴のあることは、作者が自分の死を強く感じているということである。即ち、

○ながらふまじきわが世の程にや（262）
○又こむとしのいとなみはえせぬこともやとおもふにも（267）
○267別れにしとし月日にはあふことも
これば かりやと思ふかなしさ
○我なからんのち…我身のなくならんことよりも（268）

などがあげられよう。このことより想像できることは、この時期が集の成立に関係があるのではないかということである。即ち、自分の死を感じた時作者は何らかの形でこの集をまとめたのではないかと想像するのである。加えて、この集団において日付のはつきりしている記事の多いことや、回想の助動詞「き」の使用の少ないことも、その記事の時期と集編纂の時期の近さを感じさせるのである。成立の問題はこの論とは別問題であるが、このことは下巻がこのⓣの集団の時で一旦跡切れるということを示すのではないかと思うのである。このことは、次の七夕の歌群を合わせ考えると一層補強される。

Ⓤ七夕の歌は五十一首並べられており、この集において先の題詠歌と共に多少違和感を感じさせる集団ではあ

るが、個々の歌をみると永久に変らない二星の契に対する作者のその時々の感情が詠みこまれており、集全体の縮図とも言うべきであろうか。そして、

このたびばかりやとのみおもひ
ても、又、かずつもれば、
321 いつまでか七のうたをかきつけん
知らばや告げよ天の彦星

の歌で終つている。「このたびばかりや」ということばは、集団㋓でみたような、自分の死を強く意識していることが感じられ、最後の歌では余情を残しながらも終結させるという意図が感じられる。つまり、上巻の始めから一度に編纂したかどうかは別として、㋓のころにこの部分まで成立し、最後にその縮図としての七夕の歌を思い出すままに書き綴つて行つたが、思いの外に長らえて、前掲の詞書となり、歌となつたのではないかという想像が可能ではなかろうか。

㋔は年経て後の再度の宮仕えの記事であるが、何かにつけて昔のみ恋しく思い出されることを綴つている。

㋕は籠居中の隆房をとぶらつた記事を発端として、若き日に作者が親しく交際した友の死をその子との贈答歌で描いている。若き日の思い出に生き、その思い出を語り合うことに楽しみを見出している作者にとつて、その思い出につながる友が一人減り、二人減りしてゆくことはその思い出の世界が全く周囲の人とかけはなれてゆくことであり、右京大夫にとつてはたとえようのないさびしさであつたことだろう。ここで友の死を並べたことは集が終りに近づいたことを示しているように思われる。その死からの連想で最後に再度の宮仕後に知りあつた通宗の思い出をつけ加え、又、資盛のためしなき死へとつながつてゆくのである。この集団の記事は多く年代がはつきりしているが、その配列は正しく年代順ではない。

即ち

○隆房籠居　正治二年（1200）～元久元年（1204）頃か
（記事136）五月五日
○実宗の死　建暦二年（1211）十二月八日
（記事137）建保元年（1212）十一月五節の比
○親宗の死　正治元年（1199）七月廿七日
（記事138）同年九月卅日
（記事139）某年九月十三日
○通宗の死　建久九年（1198）五月六日

であり、年代からいえば実宗の死が最後になるはずである。しかし記事はそうなつていない。本位田重美氏（注9）は作者の記憶ちがいとしておられるが、あるいは、作者はここで隆房・実宗の二人のことをのべて終りにするつもりだつたのではなかろうか。というのは、親宗に関しては、これ以前には一度も記載がなく、通宗も再度の宮仕え後の知り人であり、二人は作者にとつて隆房・実宗ほどには親密な友でなかつたようである。これは実宗の死を描いたついでにつけ加えられた記事ではないかと思うのであり、それならば年代が前後していても不思議はない。そして、実宗は上巻において、天皇・中宮・建春門院などの次に臣下としては始めて現われる人物であり、隆房も始めの頃の作者の幸福な思い出の中によく登場する人物であるので、始めと対照させる意味で下巻の終りにあたり二人をもつてきたのではなかろうか。

㊏は俊成九十の賀のはなやかな記事である。このような明るい記事で集を終らせることは作者がこの時心の安定をとりもどしており、喜びを喜びとして解しうるようになつていたことを示しているのではないかと思う。それは飯田正一氏（注10）の言われる明日の可能性を信じるようになつた作者の持つた明るさかもしれないし、あるいは又、時の流れによつて資盛への愛情を純粋化し、資盛と自分の思い出の純粋の世界を形成し得た作者の持つた明るさであつたのかもしれない。ともかく彼女がこのような祝賀の記事で集を終らせるだけの明るさをとりもどしたことは集をみじめなままで終らせずにすんだのである。

㊐はこの集の跋文である。その後に老ののち定家に歌を求められた記事㊁がつけ加えられており、その中には、右京大夫の歌人としての喜びがにじみでている。そして、この集を「建礼門院右京大夫集」と名づける起因をも含んでいるといえよう。

四

次にこれらの集団をまとめて全体の構成を見ようと思うが、その前に集全体がいくつの部分に分けられるかを考えてみたいと思う。

今まで出されている諸説には、三つの部分に分ける説（注11）、五つの部分に分ける説（注12）などいろいろある、私は区切り方の基本として、

一、上巻と下巻は分れている

二、上巻において、題詠歌以前の部分は題詠歌によつてそれ以後と区別されている。

三、下巻は七夕の歌群の後で一旦区切れている。

と考えたいのである。今、諸氏のお説を参考にして、前記のことと重複するかもしれないがその理由をまとめてみよう。

一、上巻と下巻は分れている

㋑上巻は承安四年正月一日の高倉天皇と中宮の記事に始まり、高倉院崩御の記事で終つているのであつて、首尾一貫した形態をもつており、それだけでまとまつていると考えられる。

㋺上巻と下巻は意識内容の統一性が異なる。即ち、下巻は焦点が資盛追慕の生活に限られているのに対し、上巻は宮廷女房としての生活、恋愛生活、その他の私生活と右京大夫の属するあらゆる社会での思い出がつづられており、下巻に比べると範囲が広い。

㋩その結果、下巻では配列の形式が時間に依るものがほとんどであるのに対し、上巻では、人物の連想・他のいろ〳〵な連想を用いて配列されており統一感を出している。

㋥上巻と下巻では記事の形式が異なる。即ち、上巻は詞書よりも歌の方にウエートがかけられているものが多く、下巻では歌にも詞書にもウエートがかけられていて、一層歌日記的性格を有する（注13）。

㋭下巻の冒頭の「寿永元暦などのころ」に始まる記事が長期間のことをまとめて記しており、最初の記事としての概説的感じを与える書き方である。

二、上巻において、題詠歌以前の部分は題詠歌によつてそれ以後と区別されている。

㋑題詠歌群が形態の面で他と異なつており、集の中で浮きあがつた存在である。

㋺題詠歌の前と後とではその内容が異なる。題詠歌以前は、天皇・中宮・建春門院などのお姿をのべているが、題詠歌以後には一度もそういつた記述はなく、殿上人・女房など臣下の世界での思い出ばかりである。

㋩題詠歌以前は場所が宮中に限られていて、宮中の繁栄を讃美する記事と、作者の幸福感のにじみ出ている記事ばかりである。

㋥題詠歌以前は「高倉院御位のころ」で始まつて、院

の御詠でしめくくつている。

㈱集の中にあらわれる資盛のうち、題詠歌以前の資盛だけが恋人としてではない単なる雲の上人の一人としての資盛である。即ち、題詠歌以前は恋を知る前の、宮廷女房としての明るい生活だけを描き出している。

三、下巻は七夕歌群の後で一旦区切れている。

㈠七夕歌群が形態の面で他と異つており、集の中で浮きあがつた存在である。

㈡七夕歌群以前の記事とそれ以後の記事との間に長い年月が経過している。即ち、七夕歌群以前の記事は文治三年頃と推定され、その間には約十年の歳月が流れている。

㈢その後に一度にまとめたと考えるには、七夕の歌以前の記事の記憶が生々しすぎる。

㈣七夕歌群直前の部分に作者は自己の死を意識した記述をしている。

㈤七夕歌群直前の部分には、日付をはつきりしるしている記事が多い。又、回想の助動詞「き」の使用が少ない。

㈥七夕の最後の歌が、余韻を残した結果を感じさせる歌で終つている。以上㈡～㈥の理由によつて、下巻はこの部分で一旦完結していると考えられる。

㈦七夕歌群直後の「わかゝりし程より」の記述が、最初の記事としての概説的感じを与える書き方である。

以上のような理由があげられるのではないかと思う。

それでは、これらの分け方と、前にあげた連想による集団とを合せて、全体の構成を表示してみよう。

	巻												
	上												
	序	第一部 幸福		第二部 若き日々									
集団（歌の番号）	A（1）	B（2〜13）	C（14〜53）	D（54〜69）	E・F（70〜93）	G（94〜99）	H（100〜109）	I（110〜113）	J（114〜116）	K（117〜122）	L（123〜129）
内容		幸せな宮廷生活	題詠歌	資盛との恋とその周辺	贈答歌	西八条の遊び	とぶらふ歌	宮仕生活	回想	恋のなやみ	里居

巻			
下			
		M	恋の推移 (130〜165)
		N	西山の生活 (166〜173)
		O	宮仕生活 (174〜199)
		P	死 (200〜203)
第三部 資盛追慕		Q	寿永元暦の悲しみ (204〜238)
		R	大原へ (239〜241)
		S	坂本の日々 (242〜258)
		T	わが身の死 (259〜270)
		U	七夕の歌 (271〜321)
第四部 年経て後		V	再度の宮仕 (322〜329)
		W	昔の友の死 (330〜353)
		X	俊成九十の賀 (354〜356)
		Y	(357)
附記		Z	定家との贈答 (358〜359)

第一部は集団Ⓑと一致しており、すでに前に説明したが、この部分は時期的に解釈して資盛との恋を知る前の明朗な時代と説明することもできる。しかし、それでは第二部にその時期の記事が全くないかというと、そうではない。ではなぜこの部分が別にとり出されたかといえば、それが右京大夫にとつて青春時代の最も印象深い事件であり、かつ若き日の幸福を具象する事件だからである。時期的に資盛との恋変以前だからという理由だけで特別にあつかわれたわけではないことを一言しておきたい。

第二部は、今「若き日々」と称したが、そこには女房としての社交の歌、資盛・隆信との恋の歌、それをなやむ歌、知人との交際の歌など右京大夫をとりまく種々の世界での歌が先にのべたような連想の形式によつてまとめられている。それは喜び、悲しみ、なやむ右京大夫の青春の日々であり、王朝時代にはだれもが経験していた宮廷女房としての青春である。正確にいえば青春の思い出の記録である。資盛との恋は決して楽しいばかりのものではなかつた。しかし、上巻に関する限りそれは何も右京大夫に限つたことではなく、同時代の、あるいはそれ以前以後の恋する乙女の持つ一種の宿命でもあろう。彼女はそれらあるいはバラ色の、又あるいは灰色の断想を連想によつてつなぎ、一つの青春劇を展開させているのである。しかし、その青春の花も寿永元暦のあらしによつてはかなく散らされてしまい、ここに上巻をとじて下巻へと移つてゆく、右京大夫の青春は寿永元暦の争乱で幕をとじたということになろうか。そして、青春の幕をとじると同時に上巻も終るのである。その象徴として、作者は高倉院の崩御をもちだし、上巻を首尾一貫させて形式的にも完結する形を与えたのである。

第三部は平家都落ちに続く争乱の中で、一心に資盛を思慕する右京大夫の姿を描き出している。とかく物思わせた資盛ではあつたが、永久に会えなくなつてしまつた今は、右京大夫の心の中に強く生きているのであり、一層身近に感じられるのであつた。その時右京大夫は自己の資盛への恋を純化し、絶対化して行つたのである。そして、又思い出の中の資盛を次第に純化していつて、美しい思い出の世界を形づくつて行つたのである。一緒に桜をながめた時の姿、橘の枝を折つた姿、雪の朝の姿など資盛が多く回想の中にだけ現われるのも、こうした作

者の心の反映であろう。第三部では、こうした思い出の世界を抱いて、資盛追慕のみに明け暮れる作者の純情を綴つている。

第四部は年経て後の再度の宮仕の生活と、その後の日々を連ねている。ここでは第三部のような激情的追慕の情はみいだせない。月日の流れがその激情を洗いながし、浄化された静かな追慕へと変つているのである。

しかし第三部にしても、第四部にしても、作者は決してその思い出の世界自体を描こうとはしない。その思い出を抱く作者自身の描写に集中しているのである。その意味でこの集の主人公は資盛でもなければ、まして隆信でもない。作者右京大夫自身であるといえよう。右京大夫は集の中で主人公としての自分を形成しているのである。そして、彼女は歌に長い抒情性あふれた詞書をつけることによつて、又それを意図的に配置することによつて、一層具体的に自分を主人公とした世界を描き出そうとしているのである。

五

では、なぜ右京大夫はこのような集を編纂したのであろうか。それを考えるにはもう一度序と跋にもどらなければならない。跋で、

かへす〳〵うきよりほかの思いでなき身ながら

と自分の一生を評価している作者は、序では、

われならでたれかあはれとみづぐきの
あともし末の世に伝はらば

として、暗に自分はその一生をあはれとみなしていることを示しているのである。一生をあはれとみる感情、それが右京大夫をしてこの集を編纂させたのではないだろうか。

大西克礼博士は『幽玄とあはれ』において、

ある意味に於いて人の同情を惹くに足るやうな弱少なるもの、繊細なるもの、若しくは、何等かの意味に於いて、外観上哀憐を催すに足るやうなものが、それにも拘らず一種の美として吾々の特殊な快感を伴ふところの美的感動の対象となる時に、往々にして「あはれ」なる語の用ゐられることがある。

とのべておられるが、即ち、右京大夫も自分の「うきよりほかの思いでなき」一生の中に「あはれ」なる美を見出したのであろう。そしてそれを描き出したいと願つたのではなかろうか。たしかに彼女の一生は、そのまま物

語となりうるドラマティックな一生であつた。彼女はその一生の美を素直に、誇張することなく、そのままこの集として残していつたのである。

注

1 日本古典文学大系『平安鎌倉私家集』所収の、九大本を底本とする「建礼門院右京大夫集」の本文に従う。以下、本文引用、歌の番号はすべて同書による。

2 たとえば冒頭の部分からみてみよう。

記事番号	人物	時間	事物	場所	形態	備考
1					（序	(A)
2	天皇・中宮	○		中宮の御かた		
3	中宮・建春門院 ← 八条二位	○ ←		中宮の御かた		(B)
4	実宗 ←			中宮の御かた ←	贈答	
5	実宗・維盛 ←			中宮の御かた		
6	重衡・維盛 ←					

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
				資盛 ←	宗盛 ←	重盛 ←	重盛・宗盛 ←	重盛 ←					近衛殿・隆房・重衡・維盛・資盛 ←
	○ ←	○ ←	○ ←	○	五節の比 ←	五節の比							
				恋 ←	（恋の歌）				恋				
												中宮の御かた ←	中宮の御かた
					贈答				贈答	題詠	題詠		
					(D)					(C)			

27	26	25	24	23	22	21
		宮の中将・清経 ←	宮の中将			
	資盛 ←					
	恋 ←	恋	花 ←	花		
	贈答	贈答	贈答	贈答		
	(四)					

（以下略）

3（　）で示したのは、その集団の中で多少孤立し違和感を感じさせる記事の番号である。

4「建礼門院右京大夫集の性格」　飯田正一　『関西大学文学論集』　昭26・3

5「建礼門院右京大夫集講想論のための覚書(一)」　井狩正司　『語文』　昭38・6

6 即ち、「…など申しおりは、たゞあだごととこそおもひしを、それゆへそこのもくずとなりしを、あはれのためしなさは、よそにてなげきし人におられなましかば、さはあらざらまし。返〳〵ためしなかりける契のふかさも、いはんかたなし。」の部分である。

7『評注建礼門院右京大夫集全釈』　本位田重美　武蔵野書院刊　昭25

8 (4)に同じ
9 (7)に同じ
10 (4)に同じ
11 (イ)関みさを氏（『国文学解釈と鑑賞』昭25・10）
第一期　宮仕時代
第二期　里ごもり時代
第三期　再度の宮仕時代
(ロ)井狩正司氏（『語文』昭38・6）
恋を知る以前の明朗かつ幸福な時期
上　題詠歌
恋のよろこびと悲しみとに支えられた時期
下　七夕の歌
再度の宮仕の時期
(ハ)遠田晤良氏（『北大国語国文研究』昭37・6）
第一期（上巻）承安四年から治承五年までの七年間
第二期（下巻）寿永元年から文治へかけての数年
第三期　建久七年再度の宮仕
12 関野香澄子氏「『日本文学』昭33・2）
山崎剛平氏の説引用
序
第一期　第一禁中時代
第二期　禁中退参以後
第三期　平家潰滅時代
第四期　坂本籠居時代
第五期　第二禁中時代
13 各詞書の形式において、詞書の中に句点を含まずに、直接歌に接続して歌を説明する形になつているものを「詞＋歌」、句点をもつてその部分で一応切れるものを「文＋歌」として、各々の記事をみてみると

	上巻	下巻
「詞＋歌」型	67	14
「文＋歌」型	19	25
複合型	7	11

となり、上巻では「詞＋歌」の形式が多く、下巻で

は「文＋歌」の形式や或は複合型が多いということになる。このことは、詞書の長さとも関係あることでもあろうが、上巻よりも下巻の方が、詞書をより必要とし、単なる歌の説明だけにとどまりえなかつた結果でもあろう。

以上は、卒業論文の一部をまとめたものですが、なお至らない点、誤解している点、多々あると思いますので、大方の御叱正を戴いて、逐次考察を深め、補訂してゆきたいと願つております。

おわりに、論文作成にあたり、御指導、御鞭撻を賜わりました松村博司先生並びに多くの諸先学に対しまして、厚く御礼申しあげます。

了

（愛知県立旭丘高校教諭）